

令和5年度 第2回静岡県立高等学校の在り方に関する

基本計画策定委員会

令和5年9月20日(水)
午前10時から12時まで
県庁西館4階第一会議室

次 第

1 開会

- ・教育長挨拶

2 協議事項等

(1) 第一部

- ・「第1回基本計画策定委員会における意見に関する資料」
- ・「静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画(素案)」【理念、課題、考え方等】

(2) 第二部

- ・「静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画(素案)」【基本計画の方向性と主な取組】

3 閉会

<配付資料>

- 資料1 静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画年間スケジュール
- 資料2 第1回静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会意見まとめ
- 資料3 静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画(素案)
- 資料4 「基本計画(素案)」と「第三次長期計画」の主な取組の比較
- 資料5 静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画(I~III章案)
- 別冊資料 第1回基本計画策定委員会における意見に関する資料

静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会 委員一覧

(委員長・副委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏名	所属・職名等	備考
むらやま いさお 村山 功 (委員長)	静岡大学大学院教育学研究科教授	出席
ながた なおみ 永田 奈央美 (副委員長)	静岡産業大学経営学部経営学科教授	出席
かわい たまみ 河合 多真美	ヤマハ発動機株式会社生産本部モノづくり人財戦略部長	出席
かわぐち ゆみこ 川口 有美子	公立鳥取環境大学環境学部環境学科准教授	出席
てらじま あきひこ 寺島 明彦	静岡県高等学校長協会副会長	出席
みわ こうたろう 三輪 高太郎	静岡県公立高等学校 P T A 連合会会長	出席

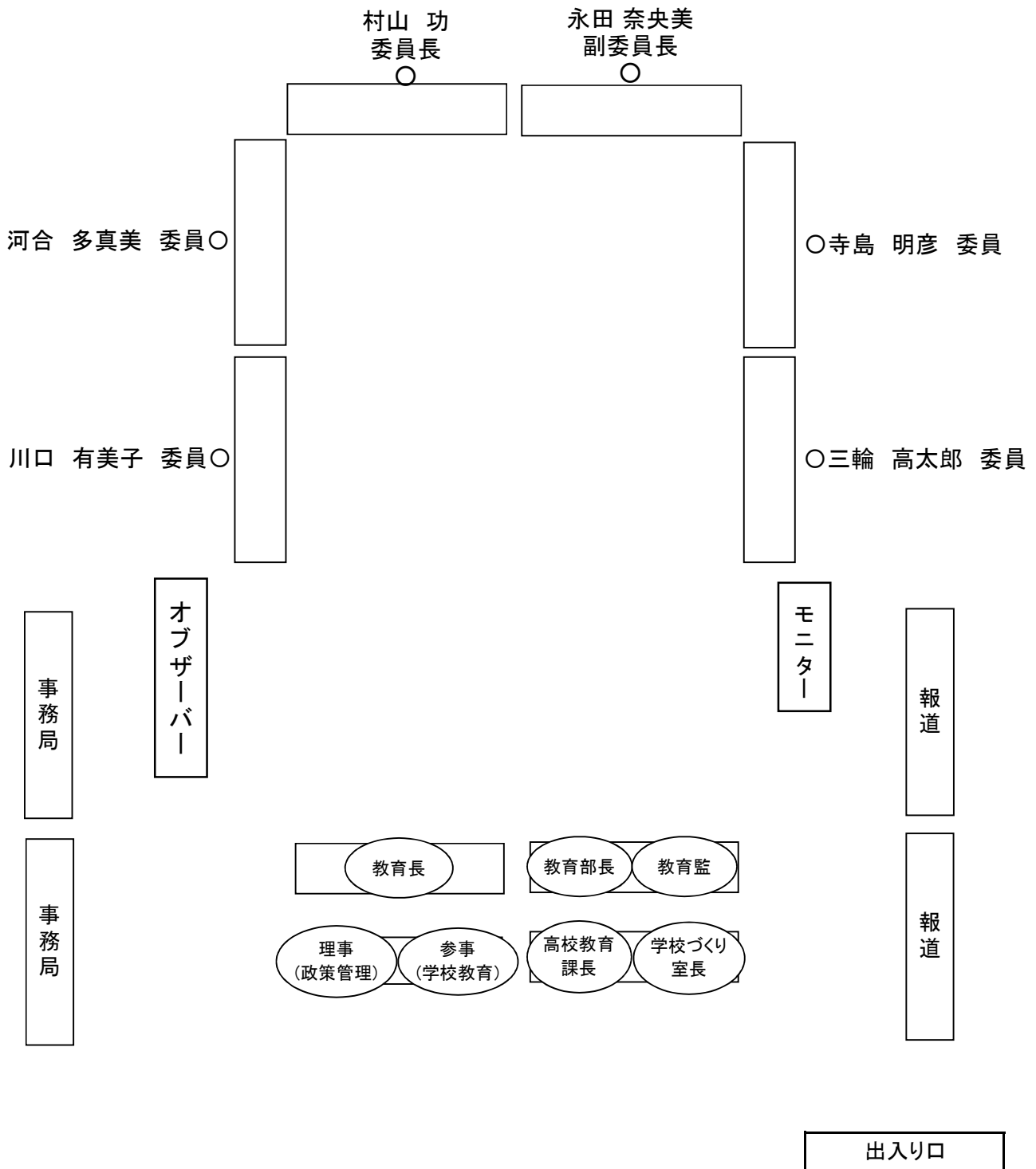
<オブザーバー出席者> (50 音順、敬称略)

氏名	所属・職名等
おだ あつし 織田 敦	静岡県高等学校長協会会長
なかだ あきひろ 仲田 晃弘	静岡県私学協会理事長

令和5年度 第2回県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会 座席表

日時 令和5年9月20日(水)10:00~12:00

場所 県庁西館4階第一会議室



令和5年度 静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画 年間スケジュール (案)

資料1

時期	事務局	協議	その他会議等
4月	<ul style="list-style-type: none"> 策定委員会設置準備 		
5月	<ul style="list-style-type: none"> 資料作成等 		第1回小委員会 (5/29) 「困難を抱える子どもたちを支える環境作りのための方策①」
6月		第1回策定委員会 (6/20) ・今後の進め方、計画策定に向けた協議等	第1回実践委員会 (6/7)
7月			第1回総合教育会議 (7/4) 第2回小委員会 (7/10) 「人口減少社会を見据えた高等学校教育の在り方①」
8月			
9月		第2回策定委員会 (9/20) ・計画素案の協議	
10月	計画素案作成		県高等学校長協会 (会長・副会長) に報告
11月	計画案作成	オンライン、書面にて随時協議を継続 (10月～11月)	第3回小委員会 (11/6) 「人口減少社会を見据えた高等学校教育の在り方②」
12月	計画案修正		第4回小委員会 (12/18) 「困難を抱える子どもたちを支える環境作りのための方策②」
1月	パブリックコメント (意見募集) (12月下旬～1月上旬)		第5回小委員会 (1/29) 「最終報告」
2月	計画案修正	第3回策定委員会 ・計画最終案の協議	県高等学校長協会 (会長・副会長) に報告 第4回実践委員会 (予定) ・基本計画案の報告
3月	<ul style="list-style-type: none"> 定例会へ議案提出→議決 計画の公表 		第4回総合教育会議 (予定) ・基本計画の報告

第 1 回県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会 意見まとめ (R5. 6. 20)

◆共通、普通科、専門学科、総合学科◆

- 教育行政の方針の中に、県立高校の生徒にどのような力を身に付けさせるべきかが明記されていない。令和 4 年度に設定したスクール・ミッションには高校ごとの個別の内容が記されているため、静岡県立高校として育てたい力を明確にすると、各学科の今後の方向性が見えてくる。
- 高校卒業者の県外流出が非常に多いため、県内企業は人材確保に苦しんでいる。実業高校の生徒は、授業で専門知識を学んでいるので、即戦力として地元企業に就職してもらいたい。高校でもう少し地元企業への就職に対する指導をしてほしい。
- 企業は、成績だけで人材を採用しているのではなく、人間性やリーダーシップ等を重視している。一方、高校側は透明性の観点等から成績順で人材を送ってきているので、もっと自由競争になるとよい。
- 全国的に高校進学率が 99%になる実態を踏まえて、多様な生徒に対して静岡県立高校として何をやっていくのかを考える必要がある。静岡県立高校像を明確にした上で、学科改善や ICT による授業配信といった技術的な議論をするべきである。
- ICT 活用について、静岡県は各高校に活用方法を委ねており、使用するアプリや配信するアプリに統一性がないため、他県と比べてばらつきが激しい県と言われている。教育 DX や静岡型 LMS を進める上で、一元管理や統一化は不可欠である。先進県では、配信センターの設置、教育委員会主導による職員研修や保護者・生徒に対する研修会を実施しており、本県でも統一化に向けて積極的な取組が必要である。
- 他県がどうしているのか、また、県内の高校がどのような教育方針をもっているのか知る必要がある。他県の動向も同時に見ることができると考えやすくなる。
- 自分たちの立ち位置を確認するためにもベンチマークとして他県の取組情報や、県内の学力レベルや他県への人口流出に関するデータがあると議論が進めやすい。他県の好事例を徹底的にまねて本県の特徴を出せるとよい。
- 本県生徒の高校入学後の学力が下がってきていることを示すデータがある。学力向上の取組については、高校の魅力化・特色化を考える上で非常に重要な課題である。
- 自社の採用試験を見ると、大学生の学力低下は年々右肩下がりである。また、県内高校の合格ラインをデータでみると下がってきている。学力向上に対する取組は、小・中学校段階でもっと強化するべきではないか。
- 大学生が、数学や物理の基本的事項について、対面授業よりもオンラインの方が個別に質問ができ、きちんと勉強するようになった話がある。こうした仕組みも必要なのかもしれない。

○例えば、スマート農業を行う場合には、農業従事者がAI等を扱う技術者と連携して仕事をするので、他業種との連携が大切になってくる。そのため、高校段階では、工業高校と農業高校の生徒が関わるなど、学校間で連携する場があってもよい。また、他業種との連携を学ぶ観点では、様々な系列を有する総合学科には期待している。

◆定時制・通信制過程◆

○私立校が圧倒的に多い通信制高校について、県立高校として通信制課程を設置する意味を考えてみる必要がある。

○通信制を選択する生徒の学びの意欲はかなり高いが、私立の広域通信制高校では、丁寧な学習指導を施している学校と生徒を集めるだけで学習指導を何もしない学校との差が激しい。学びから離脱している通信制高校では、学力保障の面で高校卒業レベルに達していない生徒が多いのではないかと心配している。

○夜間中学校は中学校の学習内容の学び直しである一方、定時制・通信制高校でも、生徒の学力レベルから中学校の学習内容を教えている実態があるので、夜間中学校と定時制・通信制高校との線引きが曖昧になってきている。

○夜間中学校を卒業した生徒の進学先候補として、自らの学びのスタイルに合うという理由から定時制・通信制高校を選ぶことが多いとの話がある。定時制や通信制高校の必要性を改めて認識できた。

○県西部地区はまだ生徒数が多く、志願倍率が高い定時制高校もあるが、中部・東部地区は、1学年10人程度の学校もある。集団が苦手な生徒にはよい環境だが、集団の中で身に付ける力を育むには難しい状況にある。

○定時制については、以前と違い働きながら学ぶ生徒は少なく、学校へ行くことが困難な生徒が増えてきている。集団の中で活動できる人とそうではない人と分けて考えるのではなく、包括していく観点からオンラインを活用して皆が同じ場で学べるようにシフトしていけないか。

◆共生・共育、公私連携、入学者選抜◆

○定員内不合格を出さないために、適格者主義を越えて希望する生徒を受け入れている県がある中で、本県ではどのような対応をするべきか考える必要がある。

○国連から日本の特別支援教育の在り方に対して是正勧告が出されている状況を受け、今後の高校の立ち位置に影響があるのではないか。

○公私連携については、以前の私立高校と現在の私立高校では役割が変わってきているので、受入れ割合を決めることに意味があるのか。

- 入学者選抜の透明性は大事だが、単にテストの評価や特定の部活動のみを対象とした裁量枠が活用されていることは時代に合わなくなってきた。もっと個性や人間性を評価できる仕組みを静岡県が先駆けて実施できるとよいのではないか。
- 裁量枠制度は部活動で活用していることが多いが、これを無くしてしまうと高校の特色が出せなくなってしまう、どの高校も同じようになってしまわないか。
- 裁量枠に関する最近の新しい動きとして、「探究活動」を選抜の際に重視する観点に挙げている高校も増えてきている。今のニーズに合った選抜方法に変わりつつある。
- 採点ミス回避のために全てマークシート型にしている県もあるが、本県では客観式の問題をあまり出題していない。詳細な採点基準について各高校で微妙に違うことが課題としてあるため、客観式問題に移行すべきという声もある。
- 再募集や追加検査があるため、静岡中央高校通信制課程の募集は新年度の4月にずれ込んでいる。中学校側からは年度内に入試業務を終わらせたい声があり、入試の時期をもう少し早めることができれば、スケジュール面でクリアできる。
- 入試の在り方は誰の立場で考えるのかで答えが違ってくる。学習指導要領では、具体的な活動の中で知識をどう使うかが大事なので、客観式の出題は方向性が違う。一方、採点の効率性や正確性を基準にすると客観式の方が確実である。静岡県立高校としてどのような人材を受入れたいのかを照らし合わせて考える必要がある。
- 少子化が進み、定員割れの学校が多くなると、入試が機能しなくなる。しかし、入試があるから生徒は勉強するようになるため、静岡県としてどのような学びを重視し、どのような人材を受入れたいのか考えていく必要がある。

◆地域との連携◆

- 高校と企業との連携は少しずつ深まってきている。特に商業高校の生徒とは商品開発などを行っており、普通科高校とも2、3年前から連携して活動している。今後さらに活発化していくとよい。
- 探究活動に重点が置かれるようになってきたので、今後、普通科高校とは取材等で企業と連携関係は築いていけるが、もっと企業側にも得るものが増えるような仕掛けができるとよいのではないか。
- 大学生が高校と地元の企業・自治体とをつなぐ役割を果たしてくれるケースがあり、特に人員不足の小規模高校では非常に助かっている。今後も大学が高校と地域との架け橋として活動を広げてくれるとありがたい。

◆小規模校の在り方◆

- 静岡県は地理的に東西に長く、中山間地域では小規模校を抱えているため、北海道が実施している「遠隔授業配信センター」のような取組を実現できるよう検討してほしい。
- 県立高校はもっと学校間の連携を含めて「静岡県」を意識するとよい。他県にはない静岡県の特色や特徴を県立高校の中に落とし込んで方向性を決めていくことが今後の県立高校の役割である。こうした取組は、1校で実施することは難しく、学校間の連携を深めて足りないところを補い合うとよい。例えば、学校間で連携してICTを活用すれば、自校で開講していない教科を学ぶ機会を得られる。
- 教科「情報」の教員の確保が非常に重要である。年度末に各高校で教員を探すことに苦労している実態があるので、対応策をきちんと示す必要がある。
- ICT活用に関して、ポイントを絞って実態調査と県外調査を実施し、経験や勘でなくデータに基づいて話し合うことで、より議論が活性化するのではないか。

◆その他◆

- 企業では、グローバル競争時代に戦える人材を育成することが大きなポイントとなる。将来的に静岡県に貢献できる子どもたちを育成するために、他県に負けない静岡の魅力を打ち出していく必要がある。
- これからの高校生には、自らの力で生きていく逞しさを身に付けてほしい。また、高校には、今後さらに「生きる力」を育ててほしい。

<当日出席のオブザーバー意見>

- ・県の内外を問わず、通信制高校の実態について生徒も保護者も情報不足に陥っている。中学校の教員も変化に追い付いていないので、調査結果や情報を共有していくことが大切である。

書面によるオブザーバーの意見等

<共通、普通科、専門学科、総合学科、定時制、通信制、共生・共育>

令和4年度に策定した基本方針の中に、『「画一」から「多様」への変革』という表現があるが、実は高校教育では、現在に至る30年は「多様化の30年」と言われている。このことは「月間高校教育6月号」において筑波大学の金子元久特命教授が述べており、現場の実感でもある。1991年の中教審で高等学校の多様化の方針が明確に打ち出され、その方針を受けて、静岡県は県立高校では全国に先駆けて多様化が進められてきた。

1994年に制度設計された総合学科については、翌年の1995年から設置し（小笠高校：全国で7番目）、現在では公立9校が総合学科になっている。駿河総合、遠江総合、浜松大平台などは再編に合わせて総合学科を設置し、多様な生徒に対応することができる学校になった。総合学科以外でも、下田、浜松湖北など、再編整備により地域の核として機能する学校も作られた。

単位制高校にも早くから取り組み、東部、西部、中部に3部制の定時制高校を設置している。また、静岡中央高校の通信制は全国的に見ても公立通信制高校の先行例となってきた。定時制、通信制はセーフティーネットとしての役割を担っており、これまで多くの生徒の学びを支えてきている。様々な学力、特性を持った生徒へ教育の機会を提供することに、静岡県は積極的に取り組んできている。加えて、特別支援学校の高等部分校の高校への設置は、本県ならではの共生・共育のあり方である。

大学進学をする生徒が多い県立高校においては、現在、県教育委員会のオンライン・ハイスクール事業に選ばれた学校を中心に、生徒の探究活動を促進し、高校時代の「自走する学び」を大学等の進路選択につなげようとする取組が行われている。いわゆる進学校のあり方も、主体的・対話的な学び、ICTの活用などを含めて、かなり変化・深化している。また、高校に併設する中等部については、本県では20年以上前に設置された（清水南、浜松西）。愛知県が中等部設置をこれから始めようとしていることと比較すると、本県の先進性が感じられる。今後の高校のあり方の議論を進めるにあたり、本県が進めてきた多様化への取り組みについて現状を改めて評価し、その上で検討していただければ幸いである。

<学力問題について>

各校ではカリキュラム・マネジメントを進める中で「生徒がつけたい力」について議論し、その上でスクール・ポリシーを定めている。生徒に育てたい学力についても、各校のスクール・ポリシーの中に具体的に書かれている。「意見まとめ」には「学力」に関連する用語が随所に使われており、「つけたい力」に関する意見も多い。しかし、学力については、国、県の方針に基づいて各校ごとに定めたスクール・ポリシーの具現化に向け、まずは各校で考えることが重要だと感じている。

ただし、今の高校生の現状を見ると、残念ながら自主的に学習する習慣のついていない生徒が相当数いると思われる。多様化を進める上で、「好きなことだけをしていればよい」という間違ったメッセージを生徒・保護者が受け取ることは望ましくない。基礎学力は様々なことを考える基盤になる。加えて、「学習」能力、つまり「学ぶ力」も必要である。

OECDの「Education2030 Project」では、「エージェンシー」という概念が度々登場する。エージェンシーは様々な能力の集合であり、このProjectでは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義している。この能力はこれからの時代を創っていく若者に求められる資質だと考える。また、エージェンシーには「責任」の意識が重要であることも示されている。しかし、日本人はこの意識が弱く、自分が社会の一員であるという意識、自分で国や社会を変えられるという意識、社会課題について家族や友人と議論することが他国と比べて極めて低い数値になっている。

日本においては、思考力、学習能力に加え、エージェンシーを高めるような教育を推奨していくと良いのではないかと考える。

<適正な学級規模、中山間地の学校>

現在の高校標準法では、1学年が5クラス以下になると教員数が一気に減るようになっている。法の改正が求められるところだが、現行法の下では、なるべく1学年6クラス以上の学校を維持すること、作ることが、学校内における授業、部活動等の選択の幅を確保する上で重要であり、再編整備はその点を意識して取り組む必要がある。

ただし、中山間地の高校の存続は地域の将来に関わる大きな問題であるため、5クラス以下であっても維持する方向性、方策について、県として明確なビジョンがあると良いと考える。ICTを用いた遠隔教育は一つの手段だが、その運用には小規模校の側にも人の力が必要である。また、評価についても3観点で適切に行う必要があることから、教員が見て評価することが必要である。「小規模校には遠隔教育を利用しよう」という考え方には一部賛成するが、そのための人の配置を一緒に考えないと、学習指導要領で示されている、教育が本来行うべきことを行わないシステムになってしまう恐れがある。

地域のために高校を残すのであれば、高校標準法ベースで教員配置を考えるのではなく、県予算で人員配置をすることについて検討が必要である。地域の維持、振興のために高校を維持する、については県単独の予算で教員を含めた人員を配置する、という考え方である。教育予算の枠の中だけで検討するのではなく、もっと大きな、静岡県全体の地域振興の核として、県立高校の意義を捉えていただくことが必要なのでは。

<教員の資質向上・多忙化への対応、学びの変革>

「教員の資質向上・多忙化への対応」項目については、すでに指摘が多くなされている「部活動」「クラブ活動」を特に焦点化して改善することが望ましい。特に、顧問等になると、放課後と週末が引率や指導・監督等で従事せざるを得ないケースが多い実態がある。これを抜本的に改善するためには、①規則による厳格な規制（「希望すれば担当できる」というのでは実効性が生まれにくいので、「管理職がそもそも担当させてはいけない」という状態を作る）、②外部人材化もしくは地域主体の活動化への転換、が考えられる。両側面からルールづくりを行う必要があるが、現実を踏まえ、①を優先的に決め、その後、徐々に外部人材化を進める方向があり得る。外部人材化によって、活動の特色が学校や地域ごとに生まれていくことが見込まれる（A 高校・B 高校は野球、C 高校・D 高校はサッカーなど）。「学びの変革」項目内の【中項目】「行ける学校」から「行きたい学校」へという方向性は、こうしたことから対応できる。この問題と一体的に、教員自身が学び続ける環境の整備を考える必要があるだろう。とりわけ、各自の担当教科等に加え、探究などの新しい学びや魅力化への対応は、「探究担当」のような一人の先生が主導的に進める形では難しいので、全教員の資質向上という側面から進めるべきだろう。こうした教員の資質向上は、時間や余裕の捻出が不可欠なので、教員の業務をジェネラリスト（何でも屋）ではなくスペシャリスト（本来の専門職）にしていく趣旨で、①のような対応が求められる。

<導入すべき具体的な ICT 活用の手法と課題・対応について>

■ネットワーク基盤の改善

2020 年に実施された「校内通信ネットワーク整備」では、校内 LAN 配線の張り直しや体育館、特別教室への無線 LAN 環境の整備は対象外であった。現在、古い校舎においては校内 LAN 配線の老朽化により故障率が増加しているため、早急な配線の張り直しが必要である。また、体育館や特別教室での動画コンテンツの視聴ニーズや、災害時に体育館を避難所として開放する場合に備え、体育館や特別教室への無線 LAN 環境の整備も進める必要がある。

教職員・生徒の端末を BYOD や自宅で利用する機会の増加や、教職員における校務系端末を学習系ネットワークで利用したいというニーズが増加する一方で、標的型やランサムウェアなどのサイバー攻撃も増加の一途をたどるため、セキュリティのさらなる強靱化が必要である。文科省の教育情報セキュリティポリシーに関するガイドラインに示されているように、従来の境界防御型の構成とは異なりアクセス認証型(ゼロトラスト)の構成※を導入することで、セキュリティのさらなる強化とともに校務系と学習系の端末 1 台化を実現でき、①コスト抑制、②時間や場所を問わず利用可能、③容易なデータ共有、④運用管理負担軽減といったメリットを享受できる。さらに、教職員や生徒が主体的に情報セキュリティに関する意識・リテラシーを高められるように、適切な研修や訓練（標的型攻撃メール訓練等）の継続的な実施が必要である。

※ アクセス認証型(ゼロトラスト)の構成

統合 ID 管理、MDM によるモバイルデバイス管理、顔や指紋による多要素認証、EDR によるエンドポイントセキュリティ、SASE によるセキュアアクセス制御、IRM によるコンテンツ保護等を組み合わせたもの。

■メタバースの教育への活用

メタバースを教育へ活用するメリットとして、①3D コンテンツによる学習効率の向上、②学習の時間的・地理的制約からの解放、③自由に失敗できる環境の提供、④非常時の状況を再現可能、⑤コンテンツを自ら作成することによる技術力向上、が考えられる。具体的には、メタバースの既存サービス※1を活用することで、オンライン授業、学校行事やイベント、遠隔地との交流、障害をもつ学生に対する教育ツール、リアルでは難しい危険な体験を行う研修、身体的・精神的・家庭の事情等で登校できない生徒の授業参加を実現可能である。一方、大学の事例ではあるが、岐阜女子大学では、メタバースを既存のサービスを使用せずに 0 から製作する活動を通じて ICT 技術力を高め、さらに地域との交流を通じて地域課題の解決に取り組んでいる※2。このような活動を高校での探求学習で実践できれば、生徒の ICT 技術力や課題解決力の向上など総合的な学びにつながり有益と考える。

※1 メタバースの既存サービスの例

NTT コノキューが提供する仮想空間プラットフォーム「DOOR」。アプリケーションのインストールは不要であり、ブラウザからアクセスや制作が可能。パソコン、スマホ、VR ゴーグル等、様々なデバイスで使用でき、個人から企業まで利用者多数。<https://door.ntt/>

※2 「岐阜女子大学メタバースプロジェクト」

岐阜女子大学では、情報や 3D モデリングの授業での学びを活用し、実際にメタバースに大学や下呂市の街並みを製作することを通じて ICT 技術力を高め、地元企業や下呂市との交流を通じて先進的な観光 DX を学んでいる。企画、立案、製作、運営等を学生が主体的に実施することで、プロジェクトマネジメント力をつける機会にもなっている。

<https://gi.jodai.jp/info/2022/09/10850.html>